



[写真 左]少女マンガ彫刻 作品番号SM0721(2021年,ホンジャラスマホガニー, 436×207×195mm)、[写真 中央]少女マンガ彫刻 作品番号SM0221(2021年,ケヤキ, 450×257×235mm)、[写真 右]少女マンガ彫刻 作品番号SM0421(2021年,ホンジャラスマホガニー, 453×257×255mm)

その大きな瞳のなかにはいくつもの星がキラキラとまたたき、くるとカールした髪はどこまでもつややかでエレガントに渦を巻く。当然、まつ毛のボリュームもたつぷりで、見るからにゴージャス。さらに、男性を象った彫像にいたっては、もはやジェンダーのボーダーさえも軽々と超えて、うっとりするような美しさをたたえている。

それにしても、な、なんだろう、この感じは……。恥ずかしながら、心をかき乱されるような感覚があって、ものすごく楽しいではないか！ おそらくほんの一瞬でも70年代の少女漫画を通過した経験のある方なら誰であれ、ここにある作品の世界観に心を奪われるはずだ。

今回ご紹介するのは、そんな一連の作品群を手がけた美術作家の樋口明宏氏。今までにないユニークなアプローチに乗り出した作家は、構えることなくごく自然体で語り出した。

「40歳を超えたあたりから、なんとなく時間の感じ方が変わってきたなって気づきが始まりました。一方で『彫刻ってそもそも何だろう？』『何かを彫って形にするって、一体どういうことなんだろう？』という禅問答みたいな根源的な問いをずっと抱きながら、作家活動を続けてきました。そういった個人的な想

恋焦がれる心をもう一度起動する

美術作家

樋口明宏

昆虫の標本や壊れた仏像など一風変わった素材を用いたアートワークで海外の展示でも高く評価されてきた美術作家の樋口明宏氏。そんな彼の最新作は、1970年代の少女漫画のオマージュともいえる異色の作品群だ。ここでは、独自の視点で今までにないアプローチに取り組む一方でスティックかつ職人的な創作活動を探求する樋口氏のクリエイティビティに迫る。

取材・文 / 石井里枝 写真・撮影 / 亀井豊 取材協力 / MA2 Gallery



樋口明宏
(ひぐち・あきひろ) 氏
美術作家

1969年東京都生まれ。95年東京造形大学造形学部美術学科卒業、97年東京藝術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了。2006年国立シュトゥットガルト美術大学卒業。スコープを使って昆虫標本に繊細な模様を描く「collection」シリーズで注目を浴びる。仏像と自由の女神の頭部を一体化した木彫作品「修復 - 神仏習合」などを発表。「歌会」(MA2 Gallery、東京、2016)、「IMITATE - MUSEUM」(MIKIKO SATO GALLERY、ハンブルク、2014)、「[Akhiro Higuchi]」(Bon Marche、パリ、2014) など個展多数。

創作へ影響を与えたのは時間感覚の大きな変化



Very, very strong-kubera(2020年,クリ, 500×304×109mm)



Very, very strong-Geb(2020年,クリ, 400×400×121mm)



修復 - ヒーロー(2018年,古い仏像/エポキシ/木材, 400×400×121mm)

「彫刻の世界には、仏像のように揺るぎない位置にいるモチーフが確実に存在していて、彫刻家や仏師の皆さんも『魂を込めよう』という強い意志を持って彫っているわけですね。その気持ちには、実は僕のようなタイプでもまったく同じなんです。一方でもっと自由に鑑賞者の原風景にアプローチできる対象を選べたら世界観をひっくり返せるかもしれないとも思っています……。少なくともその方が、人の心をより深く揺さぶることができるんじゃないかって最近はずいぶん思っています。そういった視点のもとに、70年代の少女漫画を頭のなかで思い浮かべたところ、当時の作品がいかに特別なエネルギーを持っているかが瞬時にわかってしまったんです。そこからですね。今回の創作が始まったのは」

黄金期であるばかりでなく、男装の麗人オスカルが動乱のパリを駆け抜ける『ベルサイユのばら』や、テニスコートで女子高生たちが凌ぎを削り合う『エースをねらえ!』、匂い立つような禁断の世界観で社会をくらくらさせた『風と木の詩』など、後世に語り継がれる名作が数多く誕生している。

「当時、夢中で読んだ子どもたちも、今はもう立派な大人。でも、そういった方々のなかにも、ときめくような心が間違いなく残っている。今回の作品群をつくった一番の動機は、鑑賞者たちのなかにも、まだまだ存在するはずの『悪い焦がれるような気持ち』を、もう一度、起動させたかったからです」

面白いのは、神社で御神木に近い扱いを受けながらも倒壊してしまった大樹

や、知り合いの寺の倉庫に眠っていたホンジュラスマホガニー材などを、作家本人がもらい受け、作品を彫り上げたことだろうか。つまり、乙女の心をときめかすアイコン的なキャラクターたちは、実は神社仏閣の廃材からつくられていた……という出自を持つ。なるほど。この霊妙な誕生秘話も、少女漫画が持つマジカルな力をさらに増強する装置として機能しているように思えてくる。

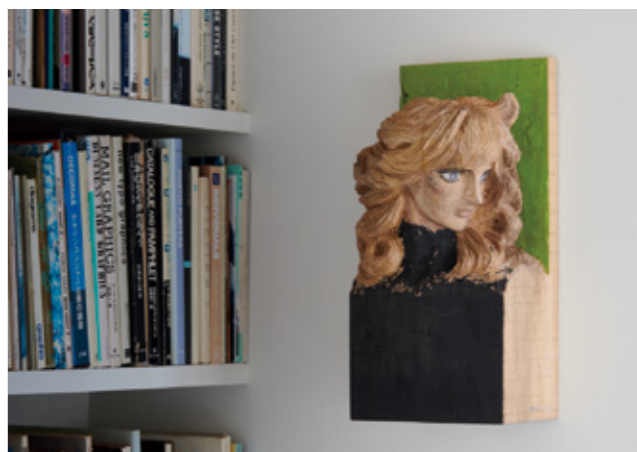
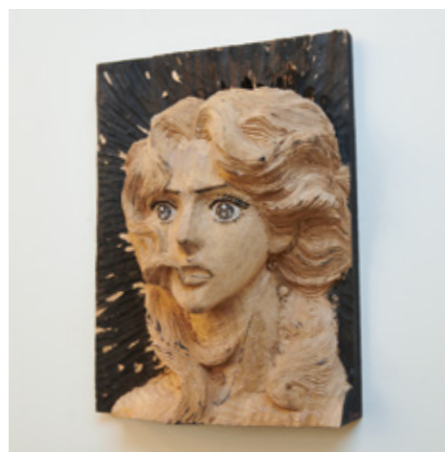
へ個人の能力が乱反射しがちでもあったが、ここ数年は一つの流れへと方向性が収斂しつつあるように思える。勝手な推察なので、ひよっとすると本人は否定するかもしれないが、ここまで述べてきたように『自身のなかにある、等身大の原風景をいかにして表象化させるか』という点にフォーカスが絞られてきたのではないだろうか。

たとえば、ギリシャ彫刻のトルソーに派手なアクションを繰り広げさせる『Very, very strong』シリーズや、壊れた仏像を自分のイメージで勝手にリペアとカスタマイズを重ねていく『修復ヒーロー』シリーズにおいても、その傾向は顕著だ。そこには、少年時代に放映されていたゴレンジャーやウルトラマンといったヒーロー特撮番組の影響も見とれる。

乙女が恋焦がれる表象が 神社仏閣の廃材から誕生?

「器としての僕は時間と共に衰えているのにも関わらず、不思議なことに内面は昔とさほど変わっていないんですよ。もちろん死への意識が前よりもリアルになってきたり、歳を重ねたことによるメンタルの変化はあるのですが、子どもの頃に好きだったことの記憶は今も変わらず鮮明だし、一つひとつのイメージもほとんど当時のままに自分のなかに存在し続けているんです。そんななかで、こうした時間の流れの感覚と、前述した彫刻に対する禅問答とがダイレクトに結びつくようになっていったという。

「器としての僕は時間と共に衰えているのにも関わらず、不思議なことに内面は昔とさほど変わっていないんですよ。もちろん死への意識が前よりもリアルになってきたり、歳を重ねたことによるメンタルの変化はあるのですが、子どもの頃に好きだったことの記憶は今も変わらず鮮明だし、一つひとつのイメージもほとんど当時のままに自分のなかに存在し続けているんです。そんななかで、こうした時間の流れの感覚と、前述した彫刻に対する禅問答とがダイレクトに結びつくようになっていったという。



少女マンガ彫刻 作品番号SM0921(2021年,クス,409×377×231mm)

文／坂本旧造



巨大なキャンティレバーは苦肉の策だった？ 建築家集団MVRDVの初期衝動がここに

今 をときめくオランダの超先鋭的な建築家集団MVRDVが、世界に一躍その名を知らしめたのが、こちらの集合住宅『オクラホマ』。

特徴的なのは、なんといってもランダムに張り出した浮遊感のあるテラスだろう。しかも、それぞれのテラスをビビッドな色調で彩ることで、いかにもMVRDVらしいファサードを実現している。また、攻めに攻めた外観ゆえに意外に思うかもしれないが、オクラホマはあくまで高齢者用の集合住宅だ。この物件に関しては、建設時にも面白いエピソードがある。実は土地の



取得の際には、100戸を予定していたそうだが、いざ敷地面積で換算してみると87戸分しかなかった。こうした状況下で不足の13戸分をカバーする手段として、MVRDVが採用したのが、最大11mまで張り出したキャンティレバー(片持ち構造)だった。捻破りながら、あえて北側の居室にこうしたソ

リューションを用いることで、たっぷりとした採光を確保することにも成功している。ただし急遽、導入を決めたため、構造計算にはたいへんな時間をとられることになったそうだが……。

ちなみに、オランダでは、公共建物の建築費の5%をアートのアプローチに当てるとを推奨するというユニークな規定があるらしい。となると、オランダの建築家たちが感じさせてくれる独特の先進性も、政府の粋な計らいがあったのこともなかも……。高齢者用の集合住宅に、ここまで自由で遊び心を加えるスピリットにも、確かにそういった傾向は見てとれる。



剥製 - キリン(2014年,剥製用動物フォルム/ウレタン/ガラス/エポキシ/合成塗料/毛糸/金具/ボタン,2750×1450×770mm)

身大の原風景を表象化しようとしている……という(筆者の)とらえ方は、かなりいいところを突いているのかもしれない。一方で「リアリティの究極は？」って問いに対しては、「そこはベタだけれど『魂を込める』ことだと今の僕なら答えるような気がしますね」と樋口氏。そして、そのためにもっとも重要なのは、「自ら手を動かし作品と格闘すること」だと語ってくれた。

「最近特にアーティストであるよりも『職人』でありたいなと。とにかく手を自ら動かしてつくる……ことを何よりも尊重したいんです。それだけにコンセプトやロジックに酔いすぎないように、気をつけなきゃならない。そういう心情もあって最近、取り組み後の相撲取りのインタビュがいいなって思っているんです。たとえば『こっつあんです』のあの言葉が、論理的である必要なんてないじゃないですか。なぜなら、ぶつかって闘うことで、彼はすでに言葉を超える何かを見せたばかりなわけだから。僕も言葉よりも作品の力で訴えられる職人になりたいんです」

最後に、次の展開に向けて現在はそのような状態にあるのか。作家の考えを聞くことにした。

「一つの連作をつくり終えると、頭の中のイメージが立ち消えて、僕はいつたん空っぽになるんです。昔はアイデアがゼロになる瞬間がすごく怖かった。



剥製 - 漆漆(2014年,クワガタの標本/漆/金粉/銀粉 250×300×62mm 額装の寸法)

なぜならその都度、作家としての境界を突きつけられるような不安があったから。でも、今はむしろその感覚を楽しんでいます。特に空っぽになった状態で散策して回るのが好きですね。外の空気や風景にふれながら歩いていると、しだいに新しいイメージとこれまでの作品づくりがつながり出して、やがて大きな一つの像を結んでいくんです。そのプロセスが、今は楽しくてしょうがなくて。ものすごく簡単に言ってしまうと、まだノープランって話なんです(笑)、次もきつと面白い世界観を提示できる気がしますね」

欧州の展示でも高く評価されてきた樋口氏が、この先どのような作品世界を見せてくれるのか。その道程も含め、今後の展開が楽しみで仕方がない。

「大人になることにもよさはあって、昔より今の方が、時間の流れも含めて全体を俯瞰できる力は高くなってきているような気がします。そういったなかで特に実感しているのは、何かに想いを馳せた瞬間に『ワクワクするような感覚』や『心が沸き立つような感じ』をとにかく大切にすべきだということ。若い頃はなかなか気づくことができませんでしたが、こうした感覚が自分の創作の原点にはあるんだと思うんですね」

遡れば20代や30代の頃には、蛾の標本に彩色した作品や、ウレタン製の剥製の原型に毛糸で編んだセーターを着させた作品を海外で発表し、反響を読んだこともあった。そこにも樋口氏らしい眼差しがある。

「僕は子どもの頃から昆虫や動物が大

好きで、自宅は生き物だらけでした。カブトムシやクワガタなどの昆虫、どじょうやザリガニ、インコも飼っていましたね。とりわけ蛾が好きなんです。彼らは世のなかでは嫌われ者ですよ。昆虫に詩絵を描く作品をつくり始めたのも、そんな彼らをポジティブに着飾ってあげようという想いからでした」

これは彼の活動初期を端的に表す言葉でもあるが、現在はさらに次のようなコメントでその意味を強化する。

「自分なりに『リアリティのある作品』を探求しようと決意したときに、できるかぎり身近にある馴染み深いものからつくるべきだろうと考えたことが、僕の出发点ですね。だからモチーフも素材も、まず生活のなかにある範囲にあるものから探しています。そういう意味では、『等